

# 自然と共生した歴史と伝統



脚折雨乞は、江戸時代に端を発したといわれる降雨祈願の民俗行事です。

昔の脚折地区の人たちは多くが農家でした。稲作には水が必要ですが、脚折には大きな川がなく、日照りが続くと作物が採れなくなるので大変困りました。

そこで、身の回りにある竹と麦わらで大蛇を作り、雨が降るように祈願しました。

自然の力を畏れながらも、自然のものを利用して、一生懸命に降雨を祈願した脚折雨乞。

こうした脚折雨乞が持つ「人と自然の共生」の精神は、現代の私たちも大切にしながら、後世に伝えていく必要があると思います。



# すねおりあまごい 脚折雨乞

脚折雨乞では、竹と麦わらで作られた重さ約3tにも及ぶ「龍神」が、300人の男衆によって担がれ、白鬚神社しらひげから雷電池かんだちがいけまでの約2kmを練り歩きます。池の中で雨乞いを行った後、龍神は担ぎ手によって解体され、天へと昇っていきます。

かんばつの年に行われていた雨乞いも、社会環境の変化により、昭和39年を最後に一度途絶えてしまいます。しかし、雨乞いの持つ地域の一体感を再認識した地元脚折地区の住民によって「脚折雨乞行事保存会」が結成され、昭和51年に復活させました。その後、昭和54年、昭和59年に実施し、それ以降は、4年に一度行うようになり、現在まで継承されています。



# 人をつつなぐ 地域をつつなぐ

## 伝統の継承

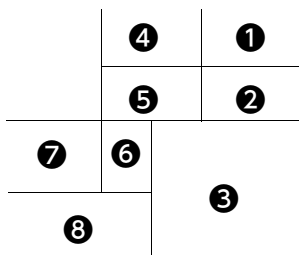
脚折雨乞行事保存会では、龍蛇の骨格の組み方や目などに使われる竹細工の講習会による「技」の伝承、子どもたちが担ぐ「ミニ龍蛇」の作成など、後継者育成にも力を注いでいます。

脚折雨乞は、今では雨を乞う行事から人や地域をつなげる行事へと、時代とともに目的も変化してきました。

## 今回の脚折雨乞

脚折雨乞の準備は、昨年11月の麦の種まきから始まりました。麦は龍蛇本体の材料です。生育後には麦刈りがあり、その他にも骨組みとなる竹の切り出しなどもあります。龍蛇は多くの人の協力によって作られ、多くの時間を掛けて完成に至ります。

また、雨乞いの前日には、群馬県板倉町にある雷電神社で、お水取りの儀式が行われます。明治時代の記録によると、「雷電池のほとりの脚折雷電社に雨乞いをする」と、必ず雨が降った。しかし、寛永の頃、池を縮めて田を作ったため、元々すんでいた大蛇がいなくなり、雨が降らなく



①麦の種まき ②麦刈り ③竹と荒縄を使って骨組作り ④金銀の紙を貼ったの歯作り ⑤麦わらの束を重ねてのわら積み ⑥お水取りの儀式 ⑦⑧当日の朝に行った笹付けと頭の飾り付け



浦井さん

担ぐのは大変でしたが、皆で声をかけ合いながら最後まで担ぎ切りました。宝珠も取れました！

麦まきから1年かけて皆で準備してきました。脚折雨乞はこれかずっと地元の誇りです。



八谷さん



田村さん

地域住民がひとつになれる伝統行事があるのはすばらしい！これからも守ってきたいです。

この貴重な伝統行事を若い世代に伝えていくのが私の役目です。まだまだ盛り上げていきます。



横沢さん  
(脚折雨乞総指揮者)

雨乞いがつなぐ  
人々の思い



なっていました。そこで板倉雷電神社で降雨祈願をして池の水を持ち帰ると、見事に雨が降り始めた。」とされています。今回も同様に、脚折雨乞行事保存会の皆さんが雷電神社まで池の水を貰いに行きました。

こうして、数多くの準備を保存会を中心とした皆さん相互の協力により、無事に終えることができ、8月7日に脚折雨乞が行われました。

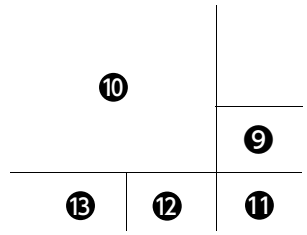
竹と麦わらで作られた長さ36m、重さ約3tの龍蛇(儀式により龍神となります)を約300人の男衆が担ぎあげ、脚折の白鬚神社から雷電池までの約2kmを練り歩きました。沿道には巨大な龍神を一目見ようと多くの人が集まりました。

雷電池に到着し、一連の儀式を終えた後、ついに龍神が池に入水し、雨降れたんじやく、ここに懸かれ黒雲と、大きな掛け声とともに池を周回し、雨乞いを行いました。その圧倒的な迫力と力強さに、観客から大きな歓声とどよめきが沸き起りました。

周回を終えると、龍神は担ぎ手によって解体され、天へと昇っていました。

全国でも例を見ない規模の雨乞行事に、今回も多くの方々が無事、大勢の観客が雷電池周辺を埋め尽くしました。

また、米国のテレビ局や中国の新聞社など、海外のメディアでも報道され、世界的に注目される行事となりました。



⑨入魂の儀により、龍蛇が龍神となる  
 ⑩国道 407 号を横断する龍神 ⑪雷電神社から持ち帰ってきたお水が雷電池に注がれる  
 ⑫雷電池に入水した龍神 ⑬解体され昇天する龍神



トゥレイン・タン・ズインさん  
 (駐日ミャンマー大使)

脚折雨乞の歴史と伝統に敬意を表します。鶴ヶ島市とミャンマーとの交流が続いていくことを願っています。

近所の方に誘ってもらい初めて龍神を担ぎました。来年には帰国するので本当に良い思い出になりました。



チュオン・コン・ティンさん  
 (ベトナム)



ルビオ・ダニエルさん(スペイン)

日本の雨乞いの文化はとても興味深いですね。ぜひ世界に向けて発信していきたいです。(外国人記者)

感動しました。最後、池の中で龍神を解体するのが衝撃的でした。幸せになれるという麦わらもしっかりもらいました。



かきね 関根さん

※鶴ヶ島市国際交流協会では、毎年ミャンマーの子どもたちに文具を送る活動を行っています。





## International Fair in Tsurugashima 2016



# 雨乞いが世界とつながる

「雨乞いのまち鶴ヶ島」活性化ビジョンの策定後、初めての開催となった脚折雨乞。今回は、このビジョンに基づき、雨乞行事をまちづくりの核とするための様々な取組が行われました。

### 人とつながる

時は折しもリオデジャネイロオリンピックの真っ最中。雨乞行事への来訪者を出迎える若葉駅西口広場では、脚折雨乞が持つ「つながりづくり」を目的に、世界の人々との交流イベント「鶴ヶ島市国際交流フェア2016」を開催しました。

会場では、ペルーやチリなどの国際交流ステージと、ヒップホップ、キッズダンスなどのわかば結市夏祭りステージのほか、JICA（国際協力機構）や市国際交流協会によるパネル展示、セネガルやブラジル料理の販売などがあり、多くの方々が異文化との交流を楽しみました。

また、大型ビジョンカーも会場に置かれ、脚折雨乞を生中継。来場者は固唾をのんで龍神の入水シーンを見守りました。

### 駅と会場がつながる

東武東上線若葉駅から共栄一本松線が開通したことで、会場（雷電池）までのアクセスが容易になり、その道中には休憩所と雨乞イトラックを配置しました。当日の夕方には、解体された龍神の麦わらを手に、若葉駅へと向かう大勢の人々の姿がみられました。



おがわ 小川さん

今回は、脚折雨乞の写真を撮ると決めていました。おかげで迫力のある写真が撮れました。



マイバンバさん  
(セネガル)

今日はセネガルの友達と一緒に楽しんでいます。奥さんはとてもやさしい。それにきれいでしょ？



ながしま 長島さん姉妹  
なか 田中さん

見たことがない、いろいろな国の食べ物があって楽しい。ブラジル料理を食べたよ。



わたなべ 渡辺さん

龍神を担ぎました。見るのとは違い、本当に重かった。池に入ってから死めぬ気でやりました。



たかはし エレナ高橋さん  
いとう ナターリア伊東さん

初参加です。お客さんもたくさん来て、とても楽しかった。次回は料理や踊りも披露したいです。

「雨乞いのまち鶴ヶ島」活性化ビジョンとは、脚折雨乞行事やその理念である「地域の絆」、「自然と共生」を今後のまちづくりに活かすための基本方針です。

# 世代がつながる

ひらのゆきお  
脚折雨乞行事保存会の平野行男会長とそのご家族に  
「脚折雨乞」について伺いました。  
(右から平野行男会長、小池正徳さん、小池昊汰くん)



**家族にとつて脚折雨乞とは  
どんな存在ですか**

会長 家族が一つになれるものです。いろいろな課題が持ち上がってききましたが、皆で乗り越えたことにより家族の絆が深まったと思います。

正徳さん 父がやってきたことを12年間見てきました。準備からいろいろなことを含めて、大変だというのが実感です。初めて見た時はすごく感動しました。初めて担いだ時は、重いととても大変でしたが、スケールの大きさに、また次も参加したいと思いました。今回、子どもが初めてミニ龍蛇を担ぎましたが、大人になっても引き継いでいってくれるのではないのでしょうか。日本全国を見てもなかなか無い規模で、自慢できる行事ではないかと思っています。

会長 我が家でもそうですが、多くのお宅でも息子さんが遠くに出ているが、戻ってきて担いだとか、各々の家族でもコミュニケーションが図れ、絆が深まっているのではないかと思います。中には海外から4年に一度だけ戻ってきて参加する方もいると聞いています。一つの行事に皆で参加するというところに、大きな意義があるのではない



子どもたちが担ぐミニ龍蛇

いでしょようか。

**脚折雨乞とは何でしょう**

会長 「脚折の歴史」そのものだと思います。先人たちが困って行ったことが始まりで、今は文化財として残していこうというところで、脚折の歴史ではないでしょうか。自分も昭和39年の16歳の時に初めて参加しましたが、本当に日照りで困ってしまった、必死な思いで雨乞いをしたことを覚えています。

正徳さん 「引き継いでいくもの」だと思っています。今後、世代が代わっていくと思いますが、この行事が終わらないように、ずっと引き継いでいかなければいけないものだと思います。

昊汰くん 「協力しあうもの」だと思っています。皆で協力するからこそ長い道を歩けるから、そう思います。

## 未来につながる脚折雨乞

鶴ヶ島市長 藤縄善朗

**伝承し続ける**

雨乞行事には三つの力があると思います。一つは伝承し続けることで生まれる力です。脚折雨乞行事保存会の皆様には敬意を表します。

今回の脚折雨乞は2020年、東京でオリンピックが開催されます。この機会に多くの方が鶴ヶ島を訪れることを願っています。また、外国の方にもぜひ脚折雨乞の魅力を知ってほしいと思っています。

これによって、脚折雨乞が市民の誇りとなり、地域の活性化につながり、将来は、鶴ヶ島の子どもたちが海外で活躍するときに、日本の代表的な行事として脚折雨乞を紹介できることを願っています。

**自然と共生する**

もう一つは、自然と共生する力です。日照りが続くと農作物がとれない。人の力ではどうにもならない自然の力に対して、竹と麦わらという自然のもので巨大な龍神をつくって降雨を祈る。こうした自然と一体となっ

たたくましさは現代の私たちも理解して、後世に伝えていく必要があると思っています。

**人をつないでいく**

もう一つは、人をつないでいく力です。農業を営む人が少なくなつた鶴ヶ島。脚折雨乞は雨を生む行事から人をつなげる行事へと、その目的も変わってきました。

今回も駐車場や休憩所などを提供してくださった地元企業の皆様、安全な開催のためにご尽力いただいた西入間警察署の方々、駐日ミャンマー大使、埼玉県知事をはじめとした来賓の皆様には感謝いたします。そして、同時開催した国際交流フェアなどの関係の皆様には御礼を申し上げます。

このほかにも多くの人たちが脚折雨乞を盛り上げてくださいました。そして、当日は2万5千人の方にご来場いただきました。これからも脚折雨乞をきっかけに、国内外を問わず多くの人たちの交流が生まれ、いくことを願っています。

今回の脚折雨乞特集は、「つるがしまの教育」との共同編集です。